

解説

栗原 俊秀

世界史の授業ではあまり触れられることのないテーマだが、一九世紀末から二〇世紀の半ばまで、イタリアもまた植民地政策を推進していた。

エリトリアの現代史では、一八八一年から一九四一年までが「イタリア植民地時代」と捉えられている。それ以前のエリトリアは、紅海沿岸の北部地域をオスマン帝国が、それ以外の土地を「バハレ・ガネシユ（「海の地」の意）」という王国が統治していた。西をスーダン、南をエチオピアにぐるりと囲まれ、紅海の対岸にイエメンを臨むエリトリアは、数世紀にわたり中東世界の辺境として存在していた。現在のエリトリアでもっとも広く用いられている言語がアラビア語とティグリニヤ語であるのは、こうした歴史的経緯による（なお、エリトリアに公定公用語は存在しない）。

先の大戦が終結してから、植民地時代の記憶はイタリア人の脳裏から急速に薄れていった。「アフリカにおけるイタリアの植民地の歴史

を、ほとんど誰も知らない」ということに、わたしはイタリアにやってきてから気づきました。それは、誰も何も知りえない、誰も何も知りたがらない、わたしたちの過去の切れ端なのです。「中略」このテーマについて書かれた文字は、それまで存在しませんでした

このように語るのは、このたび訳出した『アスマラよ、さようなら』（Asmara addio, 一九八八年）の作者エルミニア・デッローロである。彼女はイタリア植民地時代の末期である一九三八年、エリトリアの首都アスマラに生まれてくる。父方の祖父は、一八八六年にエリトリアに移住したイタリア人である。デッローロは二〇歳のとき、大学進学のためにアスマラからミラノへと移住し、以来、現在にいたるまで同地で生活を送っている。

『アスマラよ、さようなら』は作家の自伝的な作品である。今回は二一頁から二九頁までを抄訳したが、全体では約二五〇頁に及ぶ長篇である。デッローロの小説はいずれも、彼女の生地であるエリトリアと深いかわりを持っている。

二〇〇六年に発表された『遺棄』（*l'abbandono*）という作品では、植民地時代のエリトリアを舞台にして、イタリア人の父親とエリトリア人の母親のあいだに生まれた少女の人生を描いている。あるいは、『夜ごとに星を眺

めること』（*Vedere ogni notte le stelle*, 二〇一〇年）のように、現代のイタリアに生きる語り手が、エリトリアに暮らす老いた母を思い省察をめぐらすという結構の作品もある。

デッローロは児童文学も数多く手がけているが、子供向けの作品を執筆する際にも、エリトリアは重要な参照項になっている。多くの文学賞を獲得した『海に向こう側から』（*Dall'altra parte del mare*, 二〇〇五年）という作品は、地中海を渡りイタリアへと移民してくる、エリトリアの少女の命がけの旅について語っている。作品の冒頭、「二つの世界のあいだに生きる」という序文において、作家は小さな読者たちに向けて次のように語っている。

「この物語の一部は、エリトリアを舞台にしています。登場人物たちはエリトリア人です。「中略」これからわたしは、どうして自分はアフリカに生まれたのにイタリア人であり、それでも自分をエリトリア人だと思っているのか、皆さんに説明しましょう」

デッローロの祖国はエリトリアなのか、イタリアなのか。以下に引くのは、移民文学のためのオンライン文藝雑誌「エル・ギブリ」に掲載されたインタビューの一節である。

「エリトリアでは、わたしは白人だけれど、自分の家にいるように感じます。イタリアでは、誰もがわたしをイタリア人だと思っています。」

わたしは周りと同じ外見をしていて、同じ言葉を話しているからです。それなのに、わたしはイタリヤにいるとき、自分が外国人であるように感じます」

「テッローロの作品の根幹をなすのは、若き日を過ごした「自分の家」エリトリア」への、やむことのない郷愁である。植民者（もしくはその子孫）にとつての祖国とはなにか、ひいては、二つの世界に生きる者にとつての祖国とはなにか、テッローロの文学は私たち読者に豊かな示唆を与えてくれている。